

幸手市郷土資料館

令和4年度企画展

# 幸手の土器

～土器からみえる 人びとの暮らし～

土器の見方を知れば、

郷土の歴史がみえてくる

原始・古代の幸手を

のぞいてみよう！

令和4年

6/7(火)

～

7/18(月・祝)

土器からわかる  
こんなこと

土器のここを  
みると面白い！

# 幸手の土器

～土器からみえる 人びとの暮らし～

開催にあたって

土器は、多くの博物館や資料館で展示の最初に紹介されるなど、歴史の入口として親しまれている、埋蔵文化財を代表する資料です。

しかし、一口で「土器」と言っても、その種類は多種多様であり、作られた時代・地域・形・使い方など、多くの違いがあります。

土器は、その時代の人びとの生活を支えた道具の一つです。土器の変化は、それを使っていた人びとの生活の変化を反映しています。「土器の見方」を知ることは、当時の暮らしをより正確に知ることにもつながるのです。

今回の展示では、実際に市内で出土した土器を基に、「土器から何がわかるのか」「土器のどんなところをみると良いのか」、そして、そこからみえてくる原始・古代の幸手の人びとが、「どのような暮らしをしていたのか」についてご紹介します。

令和4年6月  
幸手市郷土資料館

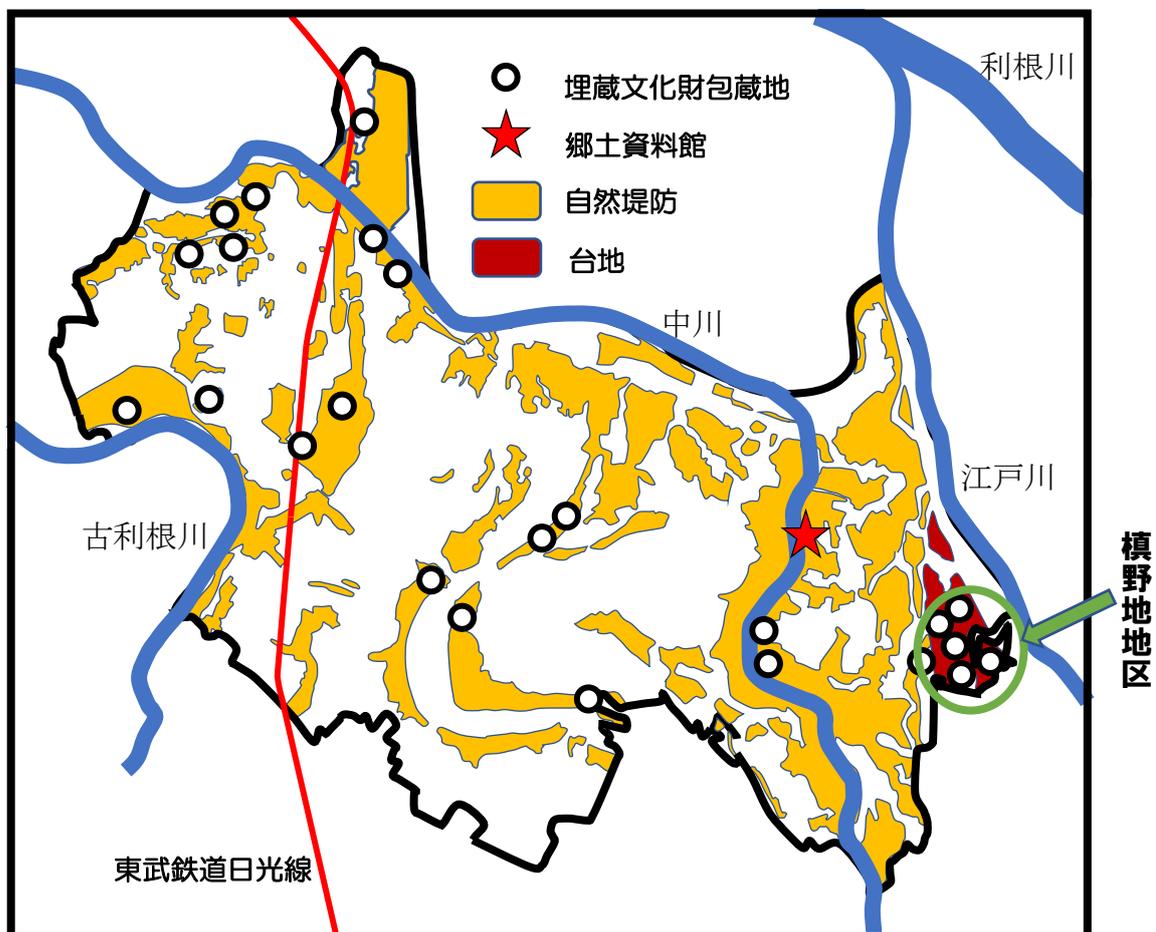


## 埋蔵文化財と土器

市内には、24か所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があり、江戸川沿いの遺跡を中心に発掘調査が実施され、多くの埋蔵文化財が発見されてきました。中でも土器はその大半を占めており、当時のくらしや社会を考えるうえで重要な資料です。

市域では、少なくとも縄文時代の初めのころには人が住んでいたと考えられます。その後の弥生時代には残念ながら明確な遺跡はありませんが、続く古墳時代には数多くの住居跡や土器がみつかっています。そして、古代・中世・近世、さらに現代にいたるまで、長く人びとの生活が営まれてきました。

それでは、江戸川沿いの榎野地地区で出土した土器から、人びとの生活がどのように変化していったのか、みていきましょう。



埋蔵文化財包蔵地分布図



## 縄文時代（じょうもんじだい）

今からおよそ 1 万 2 千年前に始まったとされる縄文時代に作られていた土器が「**縄文土器**」です。土器の表面に**縄目**の模様がつけられていたことが由来ですが、中には縄目ではなく、竹やクシ、貝殻（かいがら）などで模様がつけられた土器もあります。

縄文時代は約 1 万年続いたとされますが、その間に土器の形や模様が変化していきました。それらを研究することで、その土器がいつごろ作られたものなのか知ることができます。

幸手市で最古の縄文土器は、**約 9,000 年前**に作られたとされる土器で、表面に撚糸文（よりいともん）と呼ばれる模様がつけられていました。小さな破片ですが、幸手の歴史の始まりを伝える重要な資料です。その後、**縄文海進**（じょうもんかいしん）により地域の大部分が海となっていた約 5,500 年前の人びとは、標高の高い槇野地地区に住むようになりました。槇野地北遺跡では貝塚がみつかり、近海で貝などを採って生活していたことがわかっています。土器は採取した食料の**貯蔵**（ちょそう）や、煮炊きなどの**調理道具**として利用されていたと考えられます。

当時はまだ江戸川がなかったため、東側には広大な大地が、西側には海が広がり、狩りや木のみ・貝などを採集して生活していたと考えられます。

## 土器の見方 その1

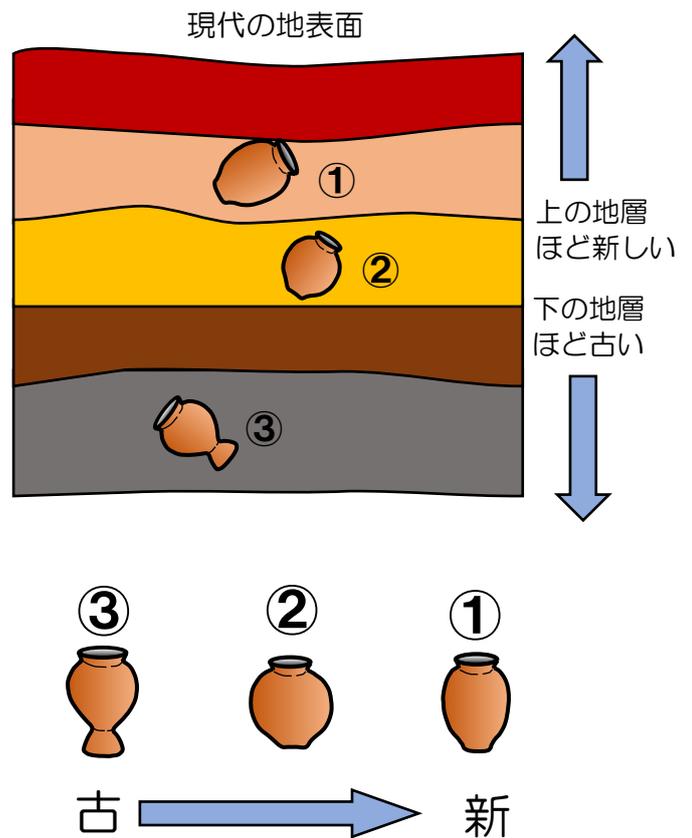
### 時代のものさし～編年～

地層(ちそう)には「下にいくほど古く、上にいくほど新しい」という法則があります。

このため、土器が出土した地層から土器同士の新旧関係がわかります。このようにして明らかとなった土器の変遷(へんせん)を「土器編年(どきへんねん)」と呼びます。

土器編年によって遺跡や遺構の時代を知ることができるため、土器は「時代のものさし」とも呼ばれます。

土器は「どんな道具だったのか」だけでなく、「どのように出土したのか」という点も重要な情報となります。



## 土器の見方 その2

### 土器の登場

煤(すす) 焦げがのこる土器は、現代の土鍋のように、「煮炊き」に使われていたと考えられます。

土器が登場するまでは「生」か「焼く」といった調理しかできませんでした。ここに「煮炊き」が加わることで、ドングリのアク抜きをしたり、硬い肉を柔らかくできるため、食べられるものの幅が広がったと考えられます。

このように土器は単なる「器(うつわ)」という道具にとどまらず、当時の人びとの生活のあり方を大きく変える存在だったといえます。

### 撚糸文(よりいともん)



約9,000年前 幸手で最も古い時期の土器片



## 土器の見方 その3

### 土器の作り方

縄文土器は、細い粘土紐(ねんどひも)を積み上げて作られました。この作り方は、弥生土器・土師器(はじき)にも受け継がれていきます。

これに対し、古代の須恵器(すえき)では「ロクロ」が使われました。また、甕(かめ)などの大きな土器では、粘土のかたまりを叩いて伸ばし、かたちを作っています。

土器に残る道具の跡などから、どのように作られたのか想像してみましょう。

## 縄文土器・弥生土器・土師器の作り方



粘土紐輪積み成形

## 須恵器の作り方 その1

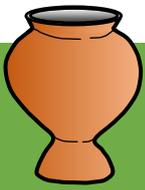


ロクロ成形

## 須恵器の作り方 その2



叩き成形



## 弥生時代 (やよいじだい)

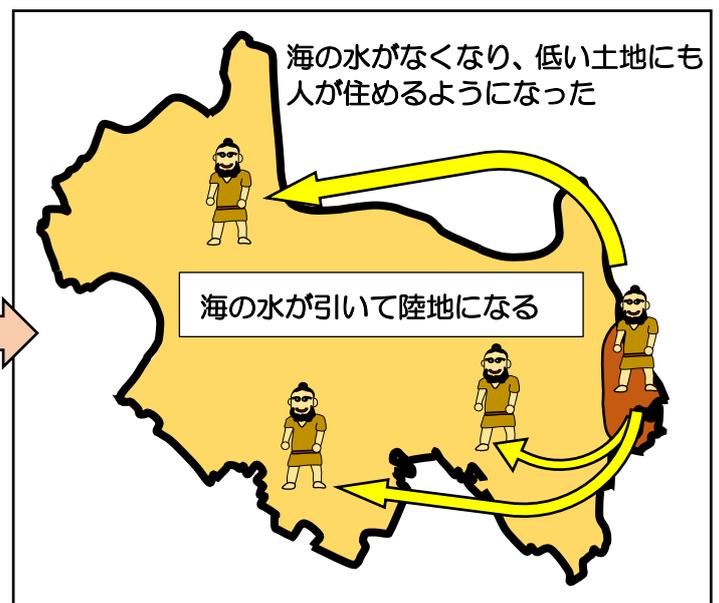
今から 2,000 年前ころに始まったとされ、この時代に作られた土器を「**弥生土器**」と呼びます。弥生時代は、それまでの狩猟採集の生活から**農耕中心**の生活に変化していきました。

弥生土器には縄文土器のような豪華な飾りはなく、形や模様は比較的シンプルになります。より実用的な形へと変化したのでしょう。

幸手市では、今のところ明確な弥生時代の遺跡は見つからないため、具体的にどのような生活をしていたかは確認できません。しかし、この頃には海水も引き、標高の低い土地にも人が住めるようになっていた可能性があり、新たな土地で農耕を中心に生活していたのかもしれません。



縄文時代前期 約 5,500 年前 (縄文海進)



縄文海進が終わり 海の水が引いた後



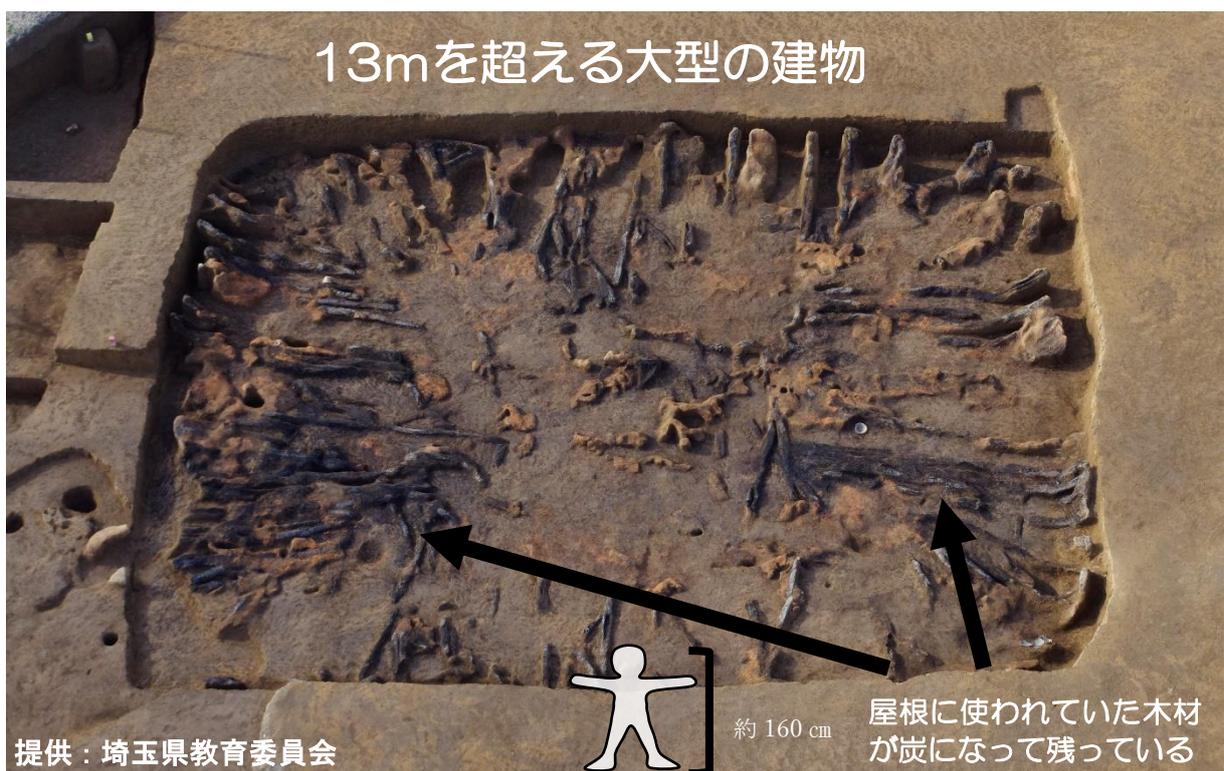
## 古墳時代（こふんじだい）

地域の有力者などを埋葬（まいそう）するお墓（古墳）が作られていた3世紀から7世紀ころまでを古墳時代と呼びます。

この時代には見た目が茶色い「**土師器**（はじき）」と灰色の「**須恵器**（すえき）」が作られていました。土師器は縄文土器・弥生土器の流れを受けつぐ土器ですが、須恵器は朝鮮半島から伝わった新しい技術で作られています。

幸手市で須恵器が見つかるのは古墳時代後期からですが、土師器は古墳時代前期から後期にかけて数多く見つかっています。ここから、数百年に渡り人びとの生活が続いていたことがわかります。

また、槇野地北遺跡からは13mを超える大型建物跡も見つかっており、規模の大きな集落であったことがうかがえます。

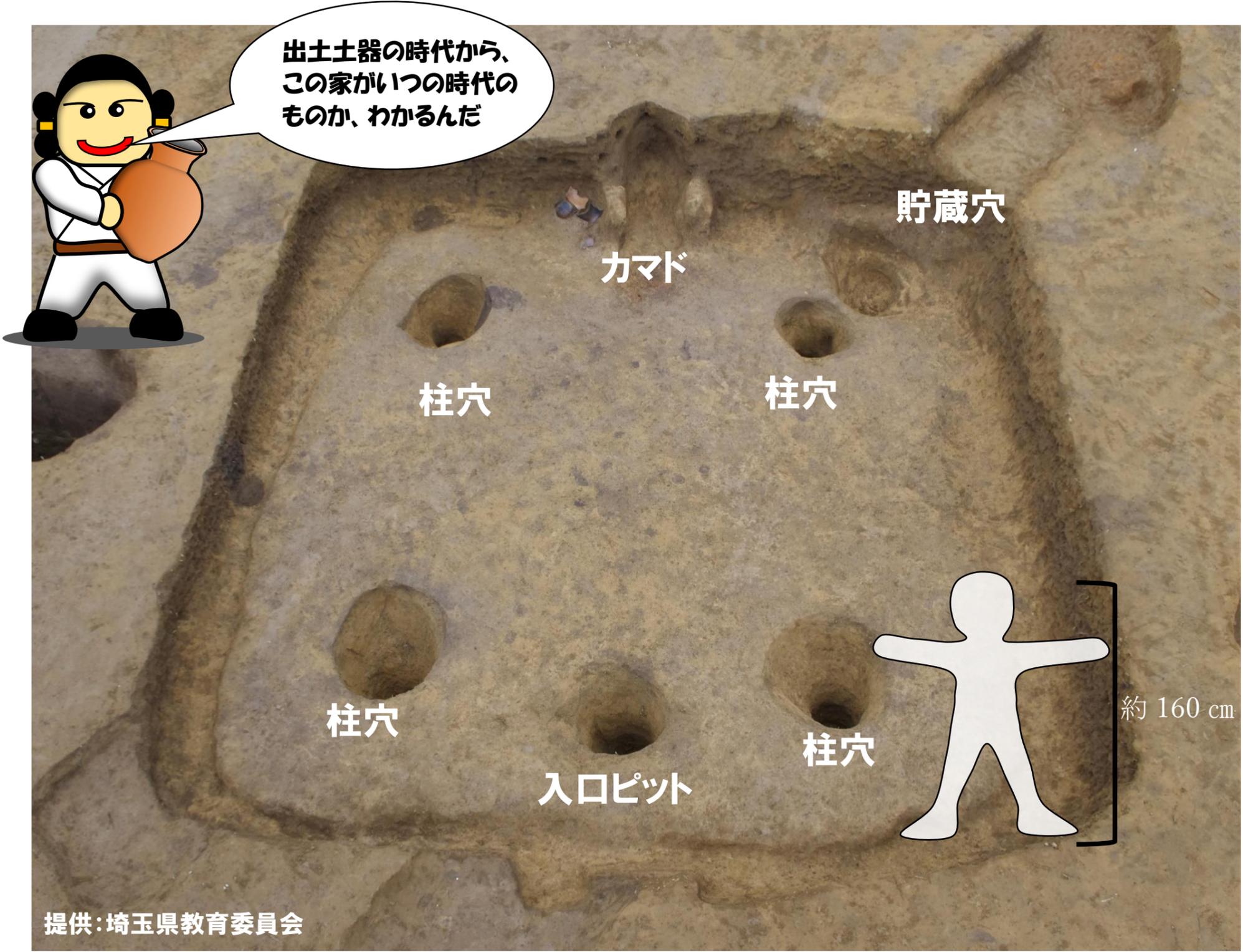


13mを超える大型の建物

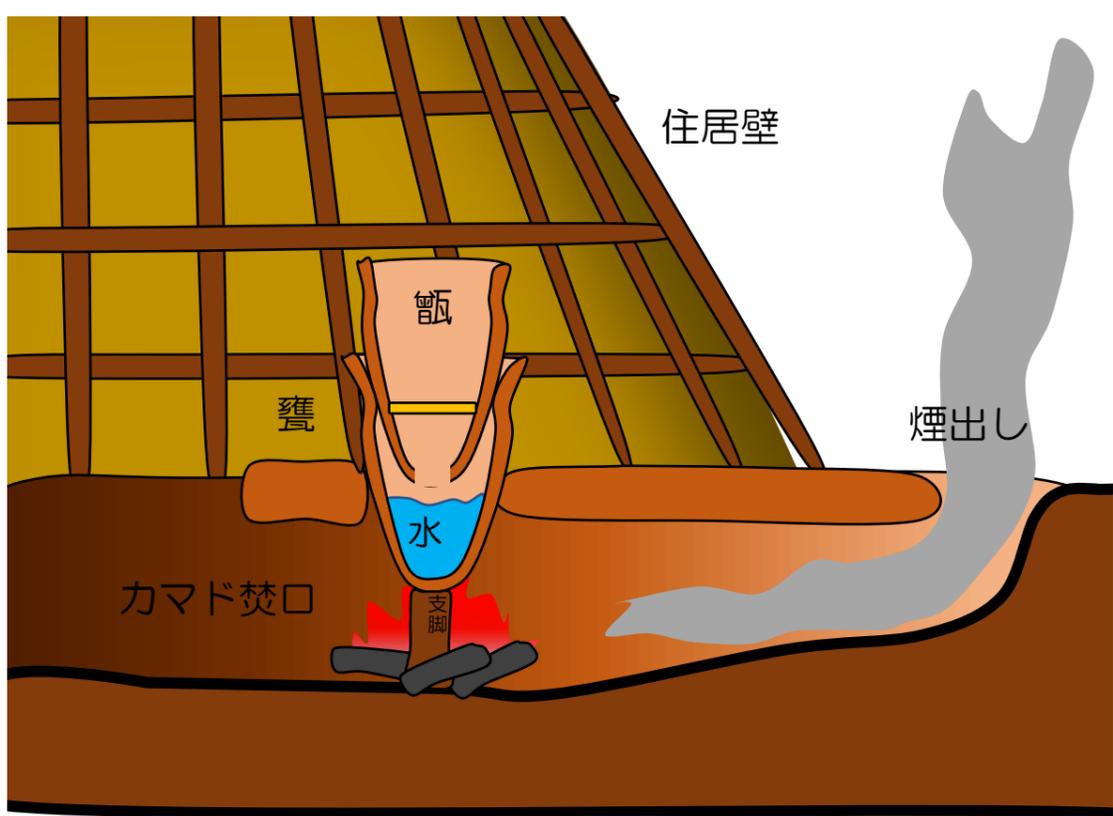
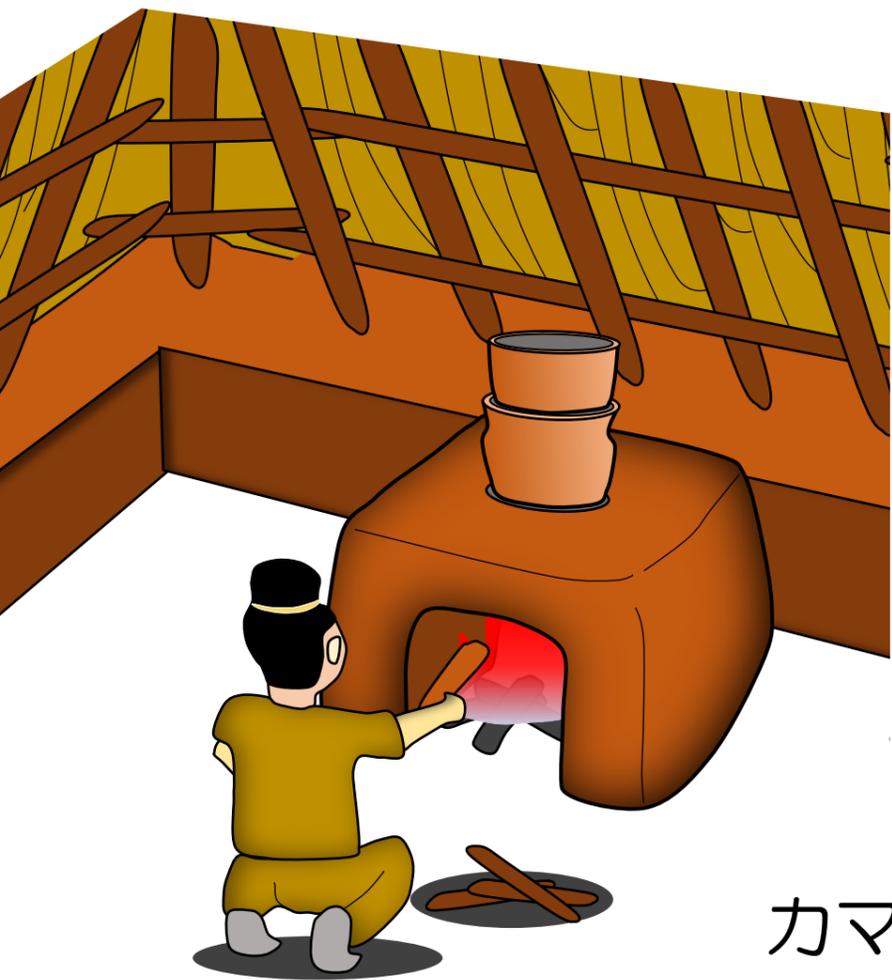
提供：埼玉県教育委員会

約 160 cm

屋根に使われていた木材  
が炭になって残っている



榎野地北遺跡 古墳時代後期（6～7世紀）の住居跡



カマドの使用法

## 土器の見方 その4

### 実用的でない土器

土器の中には器台（きだい）や底に穴がけられた壺（つぼ）のように、実際の生活には使いにくいものもあります。

これらは神様や祖先などをまつる儀礼（ぎらい）などに用いられた道具と考えられています。

このような土器から、日常の生活の中で自然や神様、祖先などをうやまう気持ちを忘れずにくらししていた当時の人びとの姿がうかんできます。



底に穴がけられた壺  
焼かれる前に穴がけられている  
ことから、元々実用品でなかった  
ことがわかる。

#### 器台

受け部には穴があいている。  
小型の壺などを受けるために  
つかった土器。



提供：埼玉県教育委員会

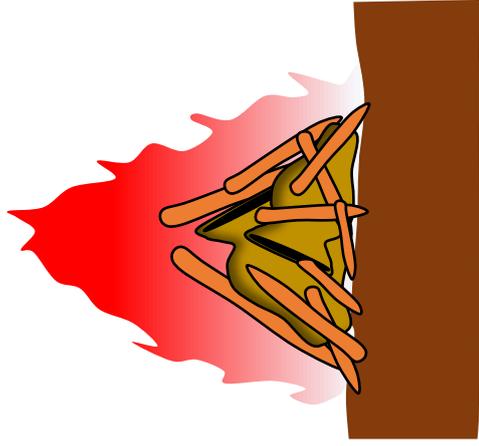
## 土器の見方 その5

### 色の違い～土器～の焼き方～

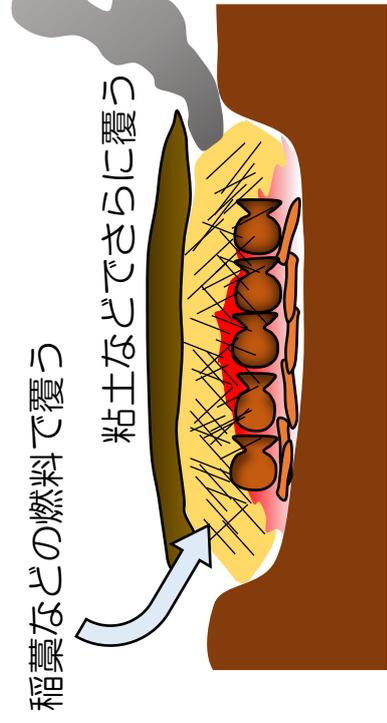
土器は、焼き方の違いによって色が変化します。イラスト①と②のように、常に酸素が供給される焼き方を「酸化焰焼成（さんかえんしょうせい）」と呼びます。この方法では、土の中の鉄分が酸化し赤茶色に焼きあがります。

イラスト③のようにトンネル状の「窯（かま）」をつくり、最後に窯の入口をふさいで焼く方法を「還元焰焼成（かんげんえんしょうせい）」と呼びます。この方法では窯内が酸欠状態となり、土器の土に含まれる酸素を使って燃料が燃えます。これにより土器は灰色となり、より硬く焼きあがるのです。

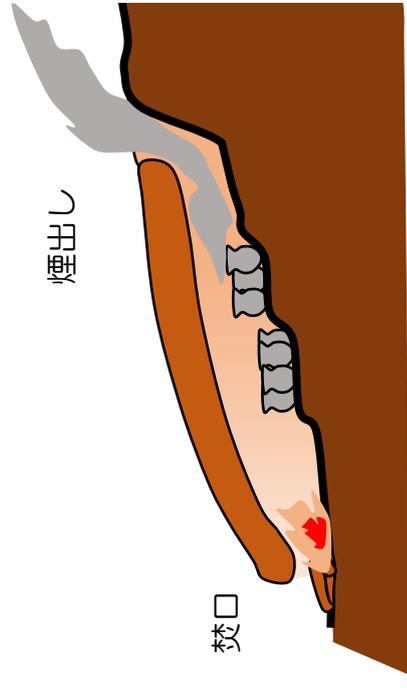
①開放型野焼き  
（縄文土器の焼き方）



②覆い型野焼き  
（弥生土器・土師器の焼き方）



③登り窯  
（須恵器の焼き方）



## 土器の見方 その6

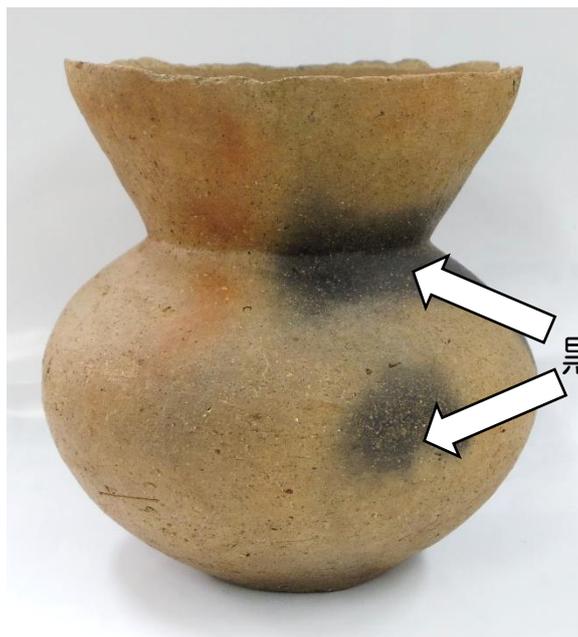
### 土器の黒いシミ

土器の表面には煤（すす）焦げ以外にも黒く変色している部分があります。これを「黒斑（こくはん）」と呼びます。

土器焼きでは、はじめに燃料から出る煤をかぶり土器全体が黒くなります。さらに焼き続けることで煤が焼け飛んで消え、赤茶色に焼きあがります。

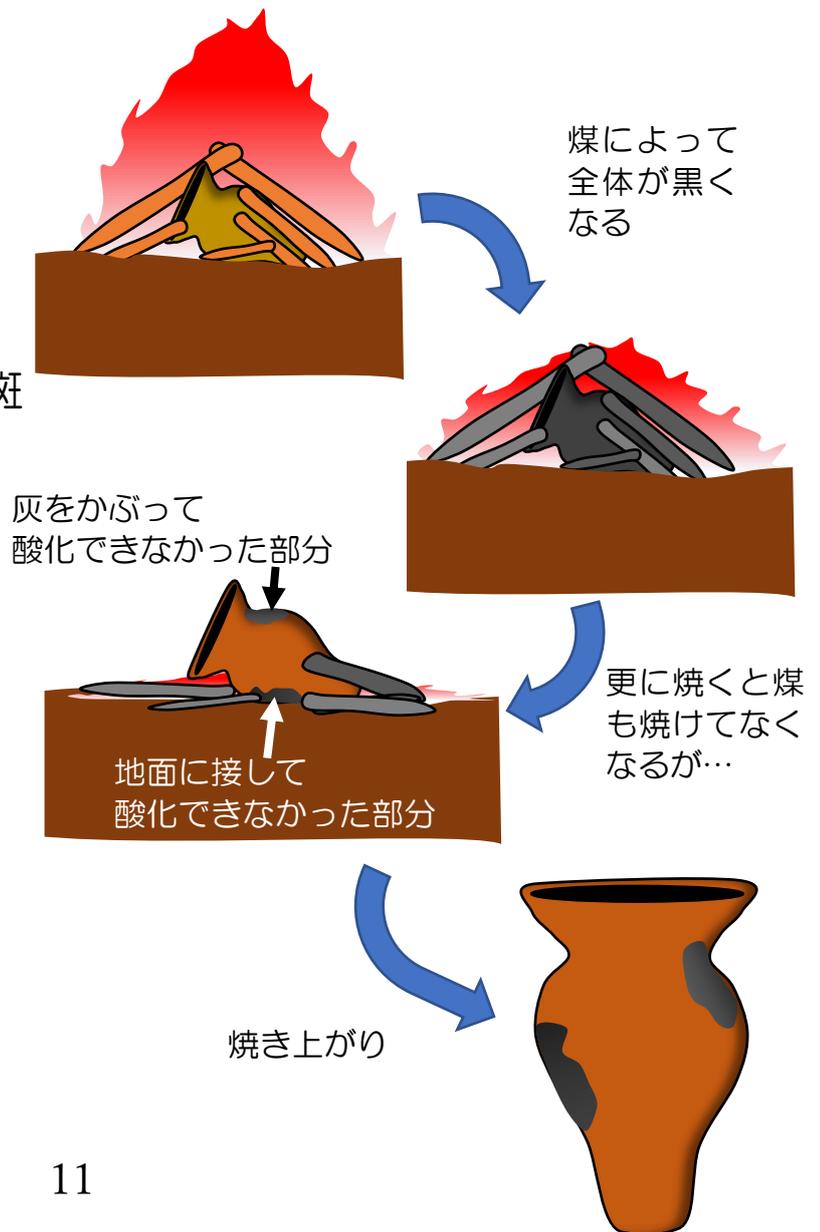
この時十分に煤が焼け飛ばなかった部分が黒斑として残ります。

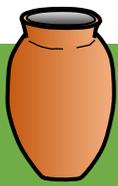
黒斑を観察することで、土器がどのように置かれていたか、燃料がどんな位置にあったのかなど、具体的な土器の焼き方について考えることができます。



小型壺

貯蔵に用いた土器。小型のため、酒などの貴重なものをいれていたのかもしれませんが。





## 奈良・平安時代（なら・へいあんじだい）

都が平城京に遷都された西暦 710 年からは奈良時代、そして平安京に遷都された西暦 794 年からは平安時代となり、これらをまとめて「古代」と呼びます。古墳時代に引き続き、土師器（はじき）と須恵器（すえき）が盛んに作られており、市内でも須恵器が多く見つかるようになります。

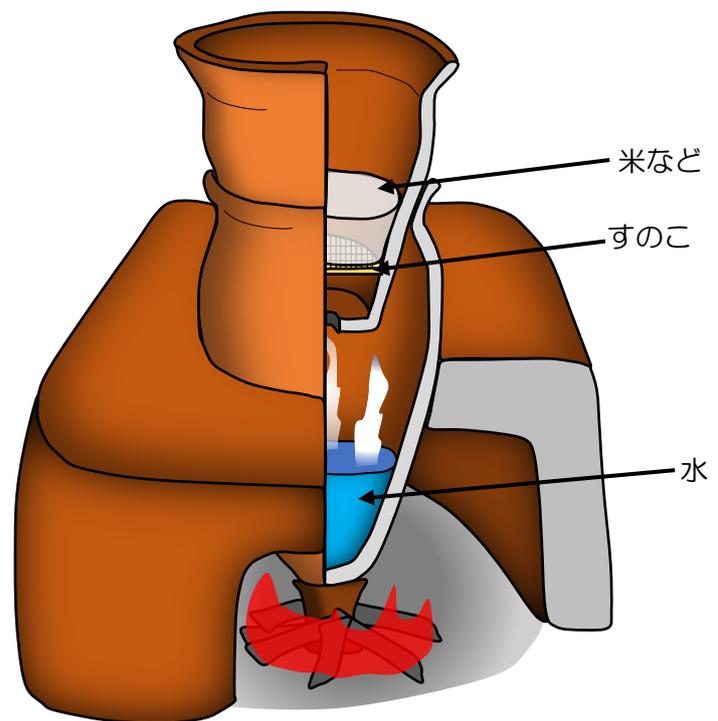
古墳時代後期（6世紀）ころから古代にかけての住居には**カマド**があります。カマドの登場に合わせて土器の使い方も変化してきました。現在のキッチンにあたるカマドでは甕（かめ）と甑（こしき）をセットで使うことで「蒸す」ことができるようになり、より効率良く調理を行えるようになったのです。

縄文時代から  
古墳時代中期（5世紀）  
にかけて



地床炉（じしょうろ）  
住居の床に直接炉を作る

古墳時代後期（6世紀）  
から古代にかけて



カマド

## 土器の見方 その7

### 須恵器の産地

現在の埼玉県の大分は古代の武蔵国（むさしのくに）にあたります。

しかし幸手市域では、今のところ武蔵産須恵器は発見されていません。対照的に茨城県土浦市の新治（にいはい）産須恵器や、古河市の三和（さんわ）産須恵器などがみつかってます。さらに土師器でも常総（じょうそう）型甕がみつかるなど、東関東地域の影響が強くみられます。

これは古代の幸手市域が武蔵国ではなく、下総国（しもうさのくに）に属していたことを示すものと考えられます。

さらに群馬県産や静岡県産の須恵器もみつかっており、土器から古代の流通圏の広さをみることができます。

## 土器の見方 その8

### 土器と文字

表面に墨で文字が書かれた土器を「墨書土器（ぼくしょどき）」と呼びます。幸手市内では墨書土器が1点、さらに硯（すずり）の一部や「パレット」として使われたと考えられる土師器碗（わん）などがみついています。

この墨書土器の文字を判別することはできませんが、文字に関連する遺物の出土は当時の社会を考える手がかりとなります。

文字資料が出土した榎野地北遺跡には農民以外にも、文字を扱える人が住み、文字を必要とする仕事に従事していたことが想定されます。単純な農村ではなく、何らかの行政的な役割を担った集落だったのかもしれませんが。

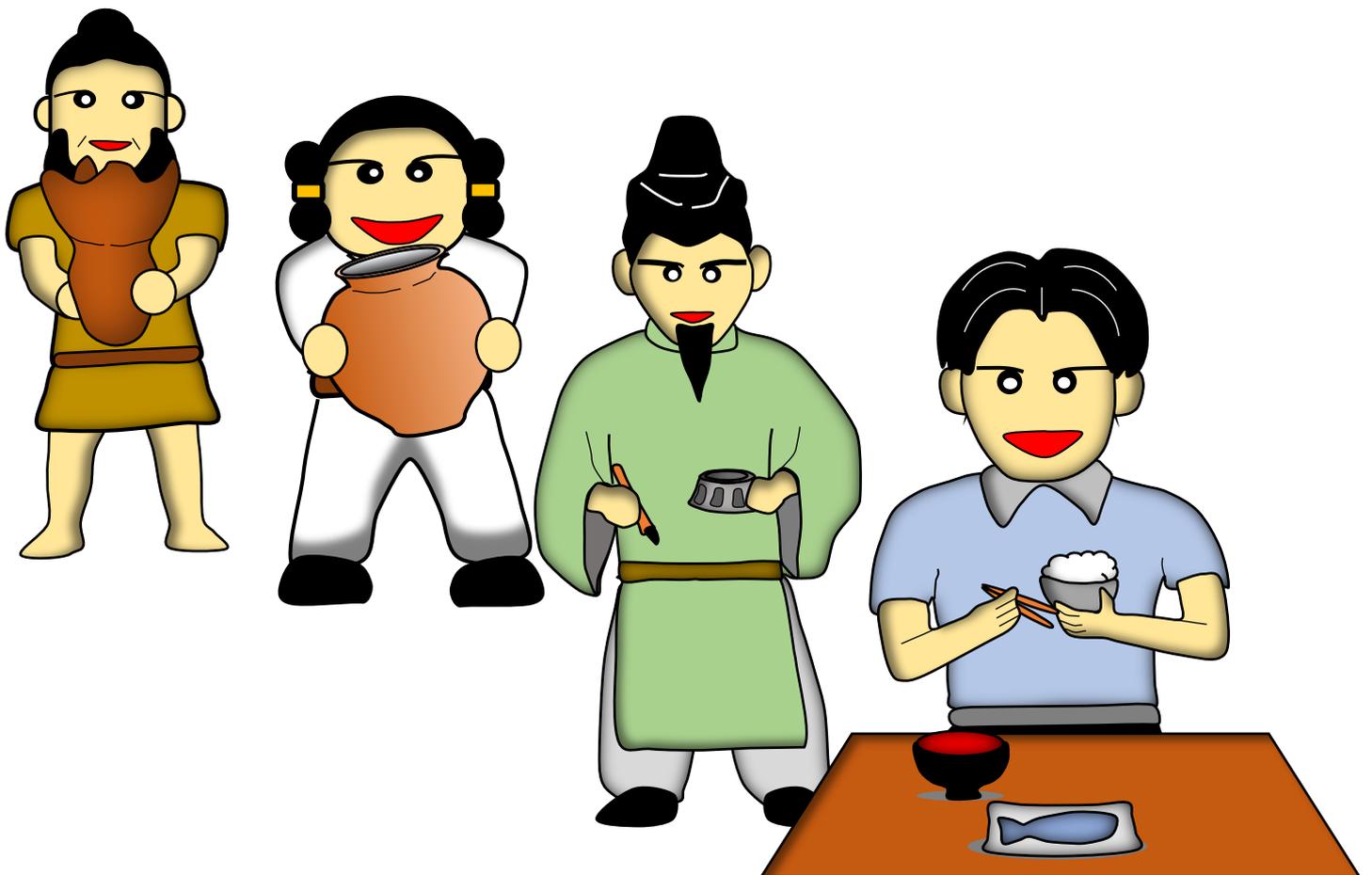


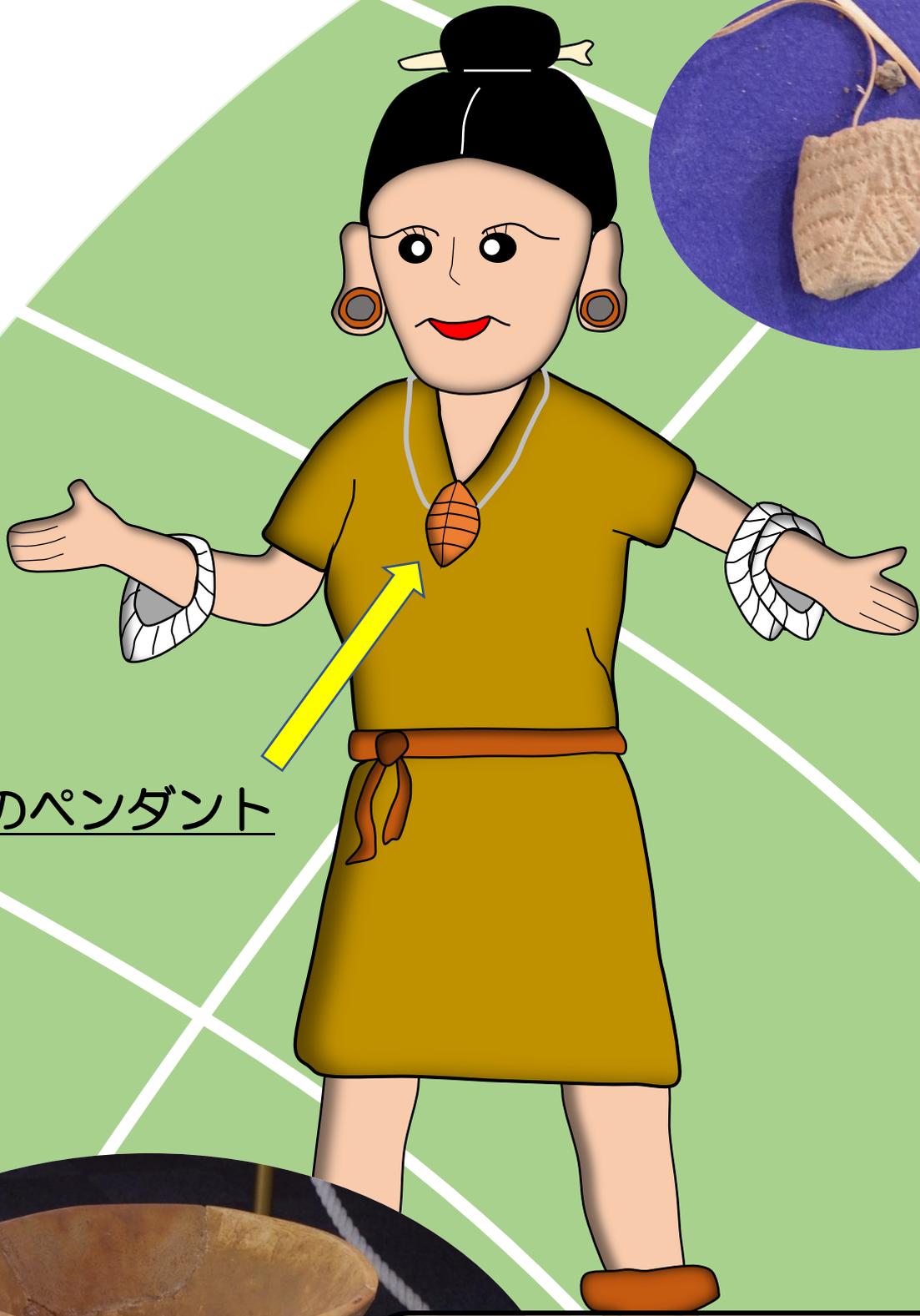
## おわりに～土器をみる意味～

文字資料がほとんど残っていない原始・古代について考える時、発掘調査で出土した埋蔵文化財が当時の文化や社会を理解する手がかりになります。中でも、時代の流れとともに姿を変える土器は、その背景にある歴史の変化も伝えてくれています。

さらに土器以外の資料とも合わせて検証していくことで、より詳しい歴史がみえてきます。

物言わぬ土器ですが、そこに込められた当時の人びとの生活、文化、社会の情報を現代人の私たちが正確に読み取ることで、過去と現在をつなげていく架け橋とすることができるのです。





縄文のペンダント

幸手市郷土資料館  
令和4年度第2回企画展 展示パンフレット  
「幸手の土器～土器からみえる 人びとの暮らし～」

編集・発行 幸手市郷土資料館

発行年月 令和4年6月

〒340-0125 幸手市大字下宇和田 58-4

Tel/Fax 0480-47-2521

休館日:月曜日 ただし7月18日(月・祝)は開館

開館時間:午前9時から午後5時まで